

現代日本の書道文化

—学校における書道教育と社会における書道教室を中心として—

人間教育専攻

現代教育課題総合コース

伊達知美

指導教員 山本準

第1章 はじめに

言葉は、人類が獲得した最大の文化的要素であると言えるのではないだろうか。人類が獲得した言葉は、発展し文字を用いるようになる。文字として音声言語を残すことで、人間のコミュニケーションは、対面的状況を越え、時間・空間を隔てることが可能となったのである。

さらに、文字言語は、多様化・複雑化し、音声言語を形にする機能だけでなく、文字そのものを美的・芸術に高めることになっていく。

しかし、現代社会ではIT化が進み文字が持っていた機能は大きく変質し、文字を書くことの意義は、衰退してきたのではないか。パソコンやスマートフォンの普及、多様な習い事の普及により書道教室は衰退していると言われている。また教育現場では、書写の指導にもどかしさを感じている教員が増えているのではないか。このことによって学校での書道教育の衰退を招く可能性もある。

文字を書くのではなく打つという現代では文字を使用する重要性は変わらないまでも、その文字を書くことの意味そのものが変質してきたと思われる。

そこで、全国調査を分析、考察し、書道教育と書道教室についてそれぞれの指導者に聞き取り調査を行い、また中学校の書写の参与観察を行った。文字を打つという現代では、かつての手書き文字に対する意識はどう変化したのかを明らかにしていきたい。

第2章 書道教育の概要

本章においては、日本での書道教育についての明治から平成までの変遷について考察を行い、学校教育現場での書写教育の参与観察を行った。

書道教育について考察を行った結果、時代背景に応じて書道の重要性が変化するということが明らかとなった。

明治以前から民衆教育として書道は、「手習い」として文字を学ぶことが他の文芸に対し重要視されていた。明治・大正時代には、西欧の教育制度を取り入れたことによって、毛筆があまり重要視されなくなり、硬筆が中心となった。昭和に入ると、戦争の時代へと突入し、西欧文化依存から、東洋文化や日本文化中心の思想へと移行したが、その中で書道も再び脚光をあび、重要性を取り戻した。戦後から徐々に小・中・高の一貫性が整えられるようになった。昭和33年から、小・中学校で硬筆・毛筆を合わせて「書写」と位置付けられ、高等学校では、「芸術科書道」として学ばれる。現行の学習指導要領は、小学校では、第1学年及び第2学年で水書用筆が用いられることが新たに加えられ、第3学年から始まる毛筆へ円滑に繋がるようになった。

また、中学校の書写授業の参与観察では、学習指導要領に沿った授業で、硬筆及び毛筆の授業であった。

第3章 書道教育の現状

本章では、「文化庁」による全国調査と「日本

書道ユネスコ登録推進協議会」の全国調査を分析し、独自に書道教室の指導者2名及び小・中学校へ勤めている学校教員3名に聞き取り調査を行った。

全国調査では、いずれの調査も共通する点があるということが明らかとなった。それは、書道教室の会員の減少と高齢化であった。また、一般会員の年会費が高額であるということが分かった。

筆者が行った2か所の書道教室への聞き取り調査では、2教室とも教室を開いた当初から現在まで会員数が増加傾向にあると述べていた。全国調査とは反対の結果であった。しかし、会員の年会費は全国調査と同様に高額であった。

次に小・中学校に勤めている教員に行った聞き取り調査の中で、次のような課題が浮かび上がってきた。それは、教員自身の書道経験の多寡によって書写授業の指導内容の質に関わってくることであった。

第4章 現状から見る課題と展望

書道教育の課題として、書写の指導は、教員の書道経験の多寡が指導する上で直接関係してくることが明らかとなった。書写教育を担う教員の立場から見ると、個々の教員の書道経験には大きな個人差があることがある。書道経験の豊富な教員であれば、書写の授業に苦勞することは少ないであろうが、書道経験の少ないあるいはほとんどない教員にとって、書写の授業は非常に荷が重いものになる。つまり、個々の教員の書道経験の差を埋めるために専科教員の配置や教員研修での書道指導を充実させていくべきではないだろうか。教員の書道経験の差を埋めることにより、指導が充実化し、児童・生徒自身の書写力が向上し、結果として児童・生徒

は、生涯を通しての生活の豊かさに繋がるだろう。

書道教室の課題として、書道を続けるには、相当な時間と経費が必要である。特に経費は、学べば学ぶ程に使用する筆・墨・紙などは高価な高級品が必要となり、また展覧会などへの出品費は高額になっていく。このように、多額の経費が必要となる学習を続けていけるのは、一部の人々に限られ、富裕者の趣味の世界のものと位置づけられてしまい、一般人にとって遠い存在となってしまいうだろう。そうならないためには、一般人から富裕者まで誰でも気楽に通え、楽しく学べるようにすべきだと考える。

また、学校と書道教室は深い関わりがあることも明らかとなった。学校が書道教育に力を入れていないと、地域の書道教室の需要がなくなるため、衰退していく可能性がある。衰退を防ぐためにも協力し合いながら指導すれば、より書道が充実するのではないだろうか。

第5章 おわりに

文字を書くことは、社会的ステータスや芸術的又は、美的に洗練されたものだったが、現代社会では、ITの発展により、言語としての重要性は変わらないままでも、文字を書くことの意味そのものが変質してきたと思われていた。しかし、学校教員そして書道教室の指導者への聞き取り調査を行い、手書き文字の本質また重要性は変わっていないということが明らかとなった。教育的にも社会的にもやはり文字を美しく、そして芸術的に書くことは重要視されているのである。そのため、学校や書道教室で学んでいるのだ。つまり、現代社会においても、手書き文字の重要性は変わっていないのではないだろうか。